

山口と秋野はエレベーターから出て、二階フロアへ入った。エレベーターを出ると、廊下が左右に伸びていた。右の廊下には居室が並んでいた。

「2階と3階には」秋野が言った。「全部で九の部屋があり、個室が三部屋、他は四人部屋です。利用者様の数は一フロアで二十七名です」

山口は廊下を眺めた。真っ直ぐに伸びる廊下は薄い茶色、壁はベージュ色と全体的に落ち着いた感じを醸し出していた。

「そして、そこがサービスステーションと食堂です」秋野は左を指しながら言った。

山口は秋野が指さした方を見ると食堂が目に入った。そして食堂の脇にはカウンターで仕切られている職員が詰めるサービスステーションが見えた。

二人が食堂に向かった。食堂では利用者が昼食を食べているところだった。

「ちょうど昼食が始まったみたいですね」秋野が食堂を見ながら言った。

山口と秋野はサービスステーションに入ると、秋野がサービスステーションでパソコン操作をしている塚本に声を掛けた。「お疲れ」

塚本は顔を上げると秋野を見た。「あ、お疲れ様です」塚本は秋野の隣にいる山口に気がついた。「こんにちは」口元に笑みを浮かべて山口に言った。

山口が挨拶を返すと、秋野が山口を紹介した。「明日から介護長として勤務する山口さんです。今は施設を案内しているところよ」

「あー、聞いています」塚本は椅子から立ち上がると山口に顔を向けた。「塚本です。よろしく願います。フロアで聞きたいことがあればおっしゃってください」

「こちらこそ」

「明日から楽しみです」塚本は会釈すると再びデスクについてパソコンを打ち始めた。

山口と秋野はサービスステーションから廊下に出ると、秋野が食堂を見ながら言った。

「歓迎されてますね」

「楽しみですと言われたのはこれで二人目だ」

「もっと増えるかも、ですよ」

「あまり期待を大きく持たれると、プレッシャーを感じるな」

「でも」秋野は上目遣いで言った。「嫌な気分にはならないでしょ」

その時、職員の声が聞こえてきた。「まだ残ってますよ。ほら、全部食べないと」

山口は声が聞こえた方に顔を向けた。その先には女性職員が女性利用者の食事介助をしていた。その利用者の顔は無表情で何か小声で言っているが、山口には聞こえなかった。

女性利用者は食べ物にはまったく視線を向けず、ただ前を見続けるだけだった。きっと認知症の利用者だろう……山口は思った。食べようとする意欲は見受けられない。いや、それ以前に目の前に出されている物が食べ物と認知していないかもしれない。

「ほら、ちゃんと食べないと病気になっちゃうわよ」女性職員はスプーンですくったおかずを口元に近づけた。「口を開けて」

女性利用者は言われたとおりに口を開けるとスプーンのおかずが口の中に入れられた。すると職員はすぐにスプーンを口の中から取りだすと再びスプーンでおかずをすくい、口元に近づけた。「はい、食べて」

まるで椀子そば状態だ。山口は思った。きっと完食するまで椀子そばが続くのだろう。あの利用者は口を開けているが、もし口を開けなかったらあの女性職員はどう対応するのだろうか。逆の立場だったらどうだい、君の口元に何が乗せられているか分からないスプーンがきたら口を開けるかい。

「あれ、どう思います」秋野は山口が食事介助を見ていることに気づき、小声で言った。

山口は何も言わず、その状況を見続けた。あの女性職員は自分の業務を優先している。食事介助を時間内に遂行することが今の彼女の最優先事項になっている。

「食事って」秋野が硬い表情で言った。「楽しく食べるから美味しく感じるものじゃありませんか。楽しくなければ食欲なんてなくなりますよね」

「確かに」食事は栄養を補給するためだけの行為ではない。

「職員は機械的に動いているようにしか見えません。あれじゃ、まるで飼育みたい」

山口は飼育の言葉に少し驚き、秋野を見つめた。飼育に見えるのか？ 上手いこと言うな。利用者に何も声をかけず、次から次へと食べ物を利用者の口に運ぶのを見れば飼育と思われても仕方ない。利用者の意思を尊重しない食事介助。

秋野は山口の思いを察したように言った。「だってそうじゃありません。あれを見ると無理矢理食べさせられているように見えてしまうんです……」秋野は一呼吸おいて話を続けた。「私が思うに、職員は業務に負われ、気持ちに余裕がないんですよ。もう少し職員が多くいれば気持ちに余裕を持って利用者に接することが出来ると思います」秋野は女性職員に顔を向けた。その顔には彼女を同情するかののように、暗く沈んでいた。

「はい、終わり」女性職員は食事介助を済ませると、女性利用者から離れ、食べ終えた食器を手早く片付けた。そして急ぎ足で他の利用者に向かい、食事介助を始めた。その利用者は彼女からの食事介助を受けるまで、食事を摂ることができず、ただずっと座っていた

のである。そして今は彼女のわんこそば介助を受けている。彼女は介助を始める際、食堂の壁に掛けてある時計を見た。

山口は彼女が時計に目を向けたことを見逃さなかった。きっと次の業務を始めるまであと時間がどのくらい残っているのか確認したのだろう。山口は食堂を見渡した。食堂にいる職員は三人、二人は食事介助と合わせて他の利用者の下膳も始めている。もう一人は薬を飲ませている。山口はステーションに目を向けた。塚本の姿はなかった。「確かに」山口は食堂内から視線を離さず秋野に言った。「職員には余裕がないみたいですね」目の前の業務をこなすことが精一杯と感じられた。

「忙しいという漢字は、心を亡くすと書きますよね」秋野が言った。「まさにこの場面が心を亡くしている状態に見えませんか」

「うーん」利用者の気持ちに気遣う余裕がないと言いたいのだろうか。

その時、男性の大声が食堂に響き渡った「薬が来ないぞ！」

「あ、あの……織田さん、ちょっと待ってください」他のテーブルで利用者に食後の薬を飲ませていた職員の鈴木が弱々しく言った。

「早く薬を持ってこい。お前はいつも遅い」

鈴木は薬とコップを持って織田のそばに行った。鈴木の子のような腹が歩く度に上下に揺れていた。「お待たせしました」

「遅い！」織田は鈴木に向けて手のひらを出した。「テキパキ動くことができないのか」

「織田さん、昼食後の薬です」鈴木は薬が一包化された袋を織田に見せた。それには織田の名前と日付、昼食後の文字が印刷されている。鈴木はそれを読み上げ、間違いがないことを確認した。

「分かってるよ。毎回いちいち言うなよ」織田が苛立ちを交えた口調で言った。

「え……でも、これは配薬時に誤薬を防ぐために声を出すことになっているんですよ」鈴木の声はか細く、まるでパワハラ上司に弁解でもしているかのようなようだった。

「お前達が勝手に決めたルールなんだから。俺には関係ない」

「勝手とかじゃなくて――」

「分かった、分かった。いいから速く薬を渡せ」織田は鈴木に向かって手を伸ばした。

鈴木はコップを置き、薬の袋を破り、薬を織田の手のひらに乗せた。

織田は薬を口に含み、コップの水で飲み込んだ。

その様子を見ていた鈴木が言った。「飲み込めましたか」

「だからいちいち聞くなよ！」

「いや、あの……だからこれも――」

「うるさいな、どうせルールなんだから。ルール、ルール。本当に嫌気がさす」

「すみません」鈴木は反射的に謝り、コップを下げ、利用者の薬ケースが置いてあるカウンターに行った。

山口は椀子そば職員が介助の手を止めると、椅子から立ち上がって鈴木のそばに近づいて行くのが目に入った。

「鈴木君」椀子そば職員が言った。「今朝の織田さんはご機嫌斜めだね。でもね、すみませんはなし。なめられるわよ。なめられたらつけ上がるから」

「すみません」鈴木はうつむきながら謝った。

「ほらあ、そうやってすぐ謝る、なんで私に謝るの。もう、そんなことだからなめられちゃうのよ」そう言うと、きびすを返して再び食事介助に戻って行った。

山口は椀子そば職員が戻っていくのを目で追った。彼女はそれを言うために食事介助を止めて彼の元に行ったのか。『なめられるな』を言いたいために……。次に山口は鈴木に目を向けた。鈴木はしばらく動かず、ただうなだれていた。

「山口さん」秋野が鈴木をじっと見つめている山口に言った。「彼は今年入職した新卒の鈴木君です。介護の専門学校を卒業してここに来ました。ホヤホヤの新人ですよ」

「新卒の介護福祉士か」山口は彼を見ながら言った。朱に交われれば赤くなる。山口は業務優先の職員が増殖したフロアを想像した。「生きづらい」

「何です」秋野が尋ねた。

「いえ、別に」

「どうです、介護のベテランの視点から色々と疑問に感じるものはありませんか。でも、この職員は良い指導者がいれば必ず変わると信じています。良い指導者が導けば」そう言うと笑顔を見せた。

山口は女性職員を見ながら何度もゆっくりと小さくうなずいた。そう信じたい。

「次を案内しますね」秋野がこの場の空気を変えるため声のトーンを上げて言った。

小久保はスプーンを置き、昼食を終わりにした。出された昼食は半分以上残っている。そもそも食欲はまったくなかった。

同じテーブルの男達も食事は済んでいた。織田は食後薬を飲むと、すぐに席を立ち、麻

痺のない右手で杖を持ち、麻痺の体を安定させながら歩くと食堂から出て行った。続いて小久保の正面に座っていた男も車いすを自ら動かし、食堂から去っていた。小久保は周りを見た。他のテーブルの利用者もほとんどが食事を済ませているようだった。しかし、小久保のテーブルにいた男達のように食堂から出て行くこともせず、テーブルにそのまま残っている利用者が多くいた。

「それ」丸眼鏡の男が小久保の残した昼食を指しながら言った。「もう食べないのなら、そのパンをもらってもいいかな」

小久保は自分が残したロールパンを掴み丸眼鏡の利用者に渡そうとした。

「ちょっと待った」丸眼鏡の利用者が止めた。「職員に見られると怒られるんだ」

「何が？」

「食べ物を他の利用者にあげることが規則で禁止されている」

小久保は驚きの表情を隠せなかった。「なぜ」

「利用者の中には糖尿病を患っている人など食事制限を受けている人がいるから、俺たちが勝手に食べ物のやり取りをすることはご法度なんだよ」

小久保は車いすの背もたれに寄り掛かった。「本当にここは規則だらけだな」呆れた口調で言った。

丸眼鏡の男は職員の間を盗んで右手を伸ばしてパンを受け取ると膝の上に置いた。

小久保は彼が右手だけを使い、左手を全く使わなかったことを見た。彼も左麻痺か。

「そうだ、小久保さんに私の名前を言ってなかったね。藤田といいます」

「小久保だ」

藤田は小久保のトレイに残っているパンを指差した。「もう一つのパンもいいかな」

小久保は食べ残しのロールパンを見た後に藤田に顔を向けた。「食べかけだけど」

「このパンは私が食べるわけじゃない」藤田は周りを確認した後に腕を伸ばしてパンを取った。そして囁くように言った。「ネズミさ」

「ネズミ？」

「二十日ネズミを飼っているんだ」そう言うと満面の笑みを浮かべた。「可愛いですよ」藤田は膝に乗せたパンをタオルで隠した。「後で私の部屋に来てください。二〇六号室、隣の部屋です。私のネズミを紹介しますよ」

「そうしよう」小久保はそう言うと、周りを見ながら言った。「ところで、なぜ皆は食事を済ませたのに何もせず食堂にいるんだ」

「ああ、あの人達ですか」藤田は食堂でじっと座っている利用者を見ながら言った。「トイレですよ」

「トイレ？」

「ええ、職員がトイレに連れて行くんです。一人で用を足せない人は職員にやってもらう。その順番待ちですよ」

小久保はあらためて食堂を見渡した。初めて見る職員が食堂に姿を現し、車いすの女性に近づいた。「星野さん、トイレに行きましょう」そう言うと、車いすを動かし始めた。小久保は目で追いながら藤田に言った。「好きな時間にトイレに行けないのか」

「さあ、よく分からない。まあ、私は何とか職員の手を借りずにできるから、好きな時間に行けるけど」藤田は小久保を指した。

「俺か、ああ、一人でやれる」小久保は言った。小久保は入院中におこなったりハビリ訓練により、トイレ動作の動きを習得していた。お陰で麻痺がある体でも何とかトイレは自分で済ませることが出来ていた。病院でリハビリ訓練をしていた頃は、退院後は自宅に戻ると信じ切っていたので、自宅の生活で必要な動作、起きる、車いすに移る、着替えや排泄する等の動きを一人でできるよう必死にリハビリ訓練に励んでいた。しかし、訓練の成果を自宅で発揮することはなく、このすずらんに入所したのである。

「でも」藤田が言った。「中には認知症で、自分の部屋に戻ることもできずただ座っている人もいますよ。ほら、私の後ろにいる女性」藤田は自分の左の肩口から後ろを指した。「認知症です。しょっちゅうトイレに行こうとして立ち上がるんだ。その度に職員から止められる」そう言うと藤田は車いすの向きを変え、女性に視線を向けた。「ほら見てて、じき立ち上がりますよ」

小久保は藤田の後ろのテーブルに座っている女性を見た。その女性は廊下のほうをじっと見つめ続けていた。表情はなく、まるで人形の顔のように変化がみられない。いったい彼女はどこを見て何を思っているのだろう……。すると彼女はゆっくりと立ち上がり始めた。椅子から離れたと同時に座面に敷いてあるチェアセンサーが反応して音楽が流れ始めた。その曲は小久保が知っている『エリーゼのために』だった。

「椅子から立ち上がると、自動的に音楽が鳴る仕組みになっているんですよ」藤田が言った。「そして職員が音に気づき」

「竹内さん、ちょっと待って、歩かないで」廊下で車いすの利用者を押していた女性職員が音楽に気がついて言った。

藤田が目を見開いた。「そして飛んでくる」

女性職員は車いすから離れ、立ち上がった竹内に早足で近づいて行った。

藤田は車いすの背もたれに寄り掛かった。「ほらね」

「なぜ立ち上がって歩くのを止めるんだ」

「どうやら一人で歩くと転ぶ危険があるみたいですよ。だから一人で歩かないように、あの装置を椅子に付けている」

女性職員は竹内の椅子に掛けているチェアセンサーの箱に手を伸ばし、その箱にあるボタンを押すと音楽が鳴り止んだ。女性職員は竹内の肩を掴んで言った。「何処に行くの」

「トイレに行かなきゃ」竹内が言った。

「トイレはさっき私と一緒に行ったでしょ」

「そう？」

「そう、行ったの。だから座ってて」女性職員は竹内を座らせた。

竹内は文句も言わず再び椅子に座った。

小久保は眉をひそめた。トイレに行きたいのになぜ職員の言葉に従うんだ。

「どうです」藤田が言った。「こんなやり取りを毎日目にしますよ。それだけじゃない。いきなり怒り出す人もいるし。また、それをなだめすかす職員も大変だ」そう言いながら藤田は自分の車いすを動かし始めた。「部屋に戻ります。後で私の部屋に来てください。待っていますよ」笑顔で言うと動き始めた。途中、車いすを止め、小久保のほうへ振り返った。「今までこんな環境で過ごしたことがありますか。普段の日常生活ではあり得ない環境でしょ」

小久保は何も言わず、藤田を見つめていた。

「ようこそ、非日常の世界へ」藤田はそう言うと、自分の部屋に戻って行った。

山口は見学をひととおり終え、秋野と一緒に事務所前に戻って来た。

「見学してどうでしたか。施設の雰囲気がかめましか」秋野が言った。

「少しはね」

「現場に入ればもっともっと見えてきますよ」

山口は顔を上げ、しばらく考え込んだ後に言った。「もしかして秋野さん、私と見学する一番の目的は職員の利用者への対応を私に見せたかった。そして私が何を感じるのかを見ていた。違いますか」

秋野は何も言わず山口を見つめた。その表情にはかすかに笑みが浮かんでいた。「見学が終わったので、施設長に声を掛けてきます」秋野は施設長室に向かい始めた。途中、足を止めて振り向いた。秋野の表情には笑みはなく、真顔だった。「総務の私が言える立場じゃないかもしれませんが、山口さんには期待しています。ここの職員は真面目です。癖のある人もいますが、基本悪い人じゃないと思います。でも適切な指導者がいないことにより、介護のあるべき姿を見失っているように感じます。正しい舵取りをして、自信を持たせてあげてください」そう言うと、山口に背を向けて歩き始めた。

しばらくすると、施設長の上井が姿を現した。「こんにちは、山口さん」小太り気味の身体に親しみやすい笑顔が施設長のおおらかさを感じさせている。「明日からよろしくお願ひしますね。私もこの施設に来てまだ半年なの。私の目から見てもこの施設はまだまだ変えなきゃと感じる事があります。山口さんの目から見て疑問に思ったら遠慮なく私に言ってくださいね。一緒に頑張りましょ」

「ベストを尽くします」

「もっと介護を質の高いものにしたいの。その為には看護師の資格を持っている私じゃなく、やっぱり介護の経験が充分にある管理者がいてこそ、ここの介護の質の向上につながり、地域から高評価をいただける施設になるわ」

地域？ その前にまずは利用者からの満足度評価じゃないのか。山口は思った。

上井は右手で片手拝みをした。「ごめんなさい、まだ来客中なの。これで失礼するわね。あなたの活躍を楽しみにしているわ。明日から宜しくね」そう言うと、上井は急ぎ足で戻って行った。

山口は秋野に視線を向け、右手で三本の指を立てた。「これで三人目だ。私に楽しみにしていると言った人は」

「施設長は裏表のない明るい性格の人だけど」秋野が言った。「面倒くさい事は丸投げするタイプ。でも山口さんだったら、施設長を器用にコントロールできると思います」

「私を買いかぶっていませんか。私のことをまだそんなに知りもしないのに」

「直感で感じたんです」秋野の表情が笑顔に変わった。「私の勘は当たるんですよ」

「おみくじでいうと、待ち人来る、の待ち人が私ですね」

「一日千秋の思いです」クスッと笑った後、背筋を伸ばした。「さて、事務所に戻ります」

「いい気分転換になりましたか」

秋野は満面の笑みを浮かべた。「ええ、とっても！」

見学を終えた山口は施設を出ると腕時計を見た。時計の針は十四時を指そうとしていた。まだ待ち合わせの時間には余裕がある。山口は知人の田村と夕方六時半から会う約束をしていた。一旦帰ってシャワーを浴びる時間はあるな山口は駐車場に止めてある自分の車に乗り込みキーを差し込んだ。山口はキーを回す手を止めて、施設を見ながら思った。そんなに質が悪いのか。俺に変えることができるのだろうか……。

山口はキーを回した。エンジンが重い音を立てて唸り始めた。山口はアクセルを踏み、自宅へと走り出した。